

# 尾張屋三平の「じや

山口正義

## 一、はじめに

越生町黒岩の三滝入口の三叉路の歩道橋の下に、高さ二メートル程の立派な石柱の道標が建っています。表には「黒山三瀧道」と少し崩した独特な書体で大きく彫られています。素人ながらにすごいと感じ入ってしまう書体です。そして右側面には何と「新吉原講中」とあり、左側面には「尾張屋三平」、裏には「慶應元年」とあります。数年前初めて見たとき、これは何か？と強烈に印象に残りました。

尾張屋三平についてはご存知の方も多いかも知れませんが、埼玉県のホームページには、「幕末の粹人。越生町津久根の出身。家業を弟に譲り江戸に出て、千葉周作道場（北辰一刀流）で剣術を学び認められた。その人柄により、新門辰五郎（侠客）とも義兄弟の契りを結んだと伝え、新吉原江戸町一丁目に『寒菊尾張』を開き尾張屋三平を名乗った。後に故郷の『黒山三瀧』を江戸で宣伝し、講（観光ツアー）や道標を作った江戸の人々を案内し、故郷の観光宣伝に尽力した」とあります。

別の一般のホームページには、「江戸吉原遊廓の副名主だった尾張屋三平が、男滝・女滝を男女和合の神と見立てて江戸に紹介し吉原の信仰を集めた。そのとき三平が建てた道標は現在も黒山三滝入口付近に残っている」ともあります。

興味のそそられる話ではありますが、ネットからは基本的にこれ以上の情報は得られませんでした。今少し「どういうことなのか」を知りたいと思います、少し調べてみることにしました。

## 二、寄進の道標、狛犬

調べてみると、尾張屋三平（本名新井宗秀、一八一五〜六八<sup>(1)</sup>）が寄進した道標は先の三滝入口のもの他に、津久根三叉路、黒山三叉路の三滝入口にもあることを知りました。他に津久根八幡神社の狛犬も奉納していますし、大平山の役の行者の石像を奉じたともいわれます<sup>(2)</sup>。故郷への強い思いがあったことは想像に難くありません。道標や狛犬の奉納は元治二年（一八六四）から翌年の慶應元年にかけてであり、文字は正木（黒田）龍塘の揮毫です。

### (一) 黒岩の三叉路（三滝入口）の道標

表には「日本無双」、「正木龍塘書」とともに大きく「黒山三瀧道」とあります。右側に「東都 新吉原講中」、左側に「講元 尾張屋三平」、裏に「慶應元年六月 助力當村中」とあります。何れも力強い筆致です。



東都	新吉原講中	左
日本	無双	表
黒山三瀧道	正木龍塘書印印 二里	右
講元	尾張屋三平	裏
慶應元乙丑歳六月吉辰	助力 當村中	

### (二) 津久根三叉路の道標

表に子の権現と高山不動の道案内があります。黒山から顔振峠を経ての道と思われませんが、こちら側から

の参拝者がそれなりにいたという  
ことでしょうか。右側に「志  
かう道」（慈光寺道）、左側に「大  
平山三瀧」、裏に「元治二年三月  
新井三平建之 助力當村中」  
とあります。新井は本姓で三平  
は俗称ですが、実家に近いこと  
による遠慮がこのようにさせたので  
でしょうか。



(三) 黒山三叉路の三瀧入口の道標  
表に「日本第一大平山 三瀧  
入口」と少し誇張した表現があ  
ります。また「龍塘木信書」と  
ありますから黒岩の道標と同一  
人物であることがわかります  
(木信は号)。右側に「東都  
新吉原講中」、左側に「助力津  
久根講中」、裏に「元治二年三  
月 尾張屋三平」とあります。

東 都	新吉原講中	表	日本第一 三瀧入口 龍塘木信書印印	助 力	津久根講中	裏	元治二乙丑歳 三月吉祥日 尾張屋三平
--------	-------	---	-------------------------	--------	-------	---	--------------------------



右	志かう道	二里	左	子ノ権現	三里廿九町	表	左	高山不動	二里半	裏	元治二乙丑歳三月吉祥日 新井三平建之 助力當村中
---	------	----	---	------	-------	---	---	------	-----	---	--------------------------------

但し、尾張屋三平の文字の上に家紋があります。これは下図のようなかんぎく 釣菊であり、新吉原の「寒  
菊尾張」に通じるものでしょうか。後述のように「吉原細見」の三平の店にはこの「釣菊」のマ  
ーク（今流の商標）が出ています。



(四) 津久根八幡神社の狛犬

この狛犬は元治二年三月とありますから、津久根三叉路と黒山三叉路の道標と同時期に奉納されています。  
一方、黒岩の三叉路の道標だけ一年余り後に奉納されています。ということは吉原講中は少なくとも二回は  
行われていることになるのでしょうか。この狛犬にも釣菊があります。  
また「奉献」の文字はやはり龍塘木  
信の揮毫によるものです。

龍塘については、文献(3)に概略、  
「字は新卿・木信、通称を源治郎と  
いい、書を能くし篆刻に巧みで、正  
木龍眠の門に学んで後に姓を正木と  
改める。住居は浅草並木町。龍塘の  
子亀塘も書家で新吉原江戸一丁目、  
三平と同じ町内に住んでいた」とあ  
りますから、江戸で書を依頼したと  
いうことでしょうか。



元治二乙丑歳	印	助 力	當村 仲来輔 新井清次郎	表	奉	裏	世 話 人 氏 子 中
--------	---	--------	--------------------	---	---	---	----------------------------

願主 東都 新吉原住 尾張屋 三平	龍塘木信書 印印	表	献	裏	三月吉祥日 江戸浅草菊屋橋 石屋五郎兵衛 内三治良
-------------------------------	-------------	---	---	---	------------------------------------

三、寒菊尾張聞書

三平の生家は屋号を角上といい、越辺川筋でも指折りの薪炭・木材問屋でした。旧家であるためか商人でも剣道を嗜み、当時の津久根村を支配していた旗本・石黒健三に仕える武士から剣を学び内免許を与えられ揚羽蝶の紋の使用を許されていたといわれています。<sup>2)</sup>

さて、三平について具体的な記述のあるものに、『素履句集』<sup>4)</sup> (新井敏之(半空会、一九五七年)、題字は武者小路実篤) という本があります。「素履」とは三平の弟・宗直(俳人でもあり晴々舎角丈と号した)の孫にあたる



尾張屋三平<sup>1)</sup>(いつ頃の  
写真か不明とのこと)

徳次郎の俳号のようです(確証はありませんが、敏之と徳次郎は同一人物のように思えます)。この本は新井素履の句集と随筆集ですが、その「附随筆」の中に「寒菊尾張聞書」という一節があります。少し長文になりますが、興味ある内容なので以下に全文を掲げてみます。

「俺はどうしても、こんな秩父の山の中で朽ちてしまふのは嫌だ。どんなにこの俺に今の生活を続けさせ様としてもそれは所詮無駄だ。お前が後を引受けて確かりやってくれ、決して俺の事は心配に及ばない。お前はこの家業に精出して祖先の祭りを絶やさないうで欲しい。」

兄宗秀が顔色を正しての言葉に、いひ出したら諾かない日頃を知ってゐる弟宗直は、黙然として答へなかつた。その夜の夕餉の膳に向つた二人の間には、酒が置かれて、しんみりと話が盡きなかつた。

「―だから改めて知らせがある迄は、たとへ幾年経ってもキット何處かで、何かして時節をうかづてるものと観念して、決して徒に憂慮してはいかぬ。俺は断じてたゞは死なぬ。一角<sup>ひどかた</sup>のものとなつて必ず便りを寄越すから―」と宗秀は繰返すのであつた。

弘化二年乙巳の秋二十五歳の宗秀は、遂に故郷を捨て、出奔して仕舞つた。性来質実重厚な弟宗直は、当年二十二歳の若者であつたが、兄失踪の後を受けて家格を護つて父祖の業である木材薪炭を扱ひ、妻を娶り、二男一女を儲けて、江戸深川の木場衆と称する大問屋筋を初め、千住大橋、浅草花川戸邊にも取引先多く、家運漸く順調に、所持の山林には杉檜を植ゑて、その成長を見守り、

「終日看山厭山 買山終待老山間」

と言ふ心境にあつた。しかし取引の關係から少なくとも半年に一度は、江戸に向いて商用旁廣い世界の動きを知り、江戸の文化と郷里とを結ぶ役も果し、且つは窃かに風流韻事をも嗜んで、長者の風格があつた。

かくて宗直が四十年の春に、一別以来の便りが、赤紙つきで兄宗秀からとゞいた。それによると、故郷を立退いた宗秀は江戸を目ざしたが、途中思はぬ病氣にかゝり、艱難辛苦のすゑ流れながれて、上州倉賀野在に足をとゞめること一年あまり、漸く江戸入りの素志を達したのは、出奔以来実に二ヶ年半の後であつた。

槍先の功名に、一城の主と出世した戦国の昔は暫らく措いて、今や天下は、内憂外患紛糾を極めた徳川幕府の断末魔。腕と膽略次第では、随分思切つた活躍が出来た風雲の時代とはいひながら、何處を如何いふ運命の神の導きによつたものか、当時天下に雷名を轟かす北辰一刀流の大先生、神田お玉ヶ池千葉周作の門に入り、その内弟子として、剣の冴え太刀筋のよさ、胆の太さを認められ、多くの門弟の中から特に抜擢されて、その頃幕府が旗下の子弟を教育する爲めに設けた講武所へ先生の師範代として、駕籠で出入りするに至つた。由来宗秀は弱年の頃から剣道が好きで、郷里にあつた時既に土地の劍豪石黒健三に就いて優秀の技により免許を授けられ、揚羽の蝶の紋所を大きく現はした一枚革の自慢の胴を着けて、竹刀一本で他の道場を荒らし廻つた時代もあつたのだつた。

千葉先生門下に於ける劍客生活は勇猛精進を極め、修養の果を積んだものであつたが、そこにはまたいろくの人間らしい怨恨、狡猾、陥井などがあつて、暗闘の絶えないのに業を煮やした宗秀は、やがて千葉道場を飛び出した。腕の出来るのにまかせて、笹川の繁造に於ける平手酒造の様な役廻りが待つてゐて、彼の生活は、日に日に荒んで、放浪の旅は関八州は元より函嶺を越えて遠く関西から山陰、山陽、本州は奥州の僻

地をのこして殆ど其の足跡を印した。その間には押入簀にも二度三度ならず、随分いろんな境涯を潜つて、つづさに人生の惨苦に男子の心膽を練り上げ、再び江戸に戻つてからはいつか市井遊俠無頼の徒の棟梁に推され、そのころ大江戸の市中に名声高かつた浅草寺山内の取締で、新門の固めを仰付かつてゐた、「を組」の頭新門の辰五郎と兄弟の契を結びその一代の俠骨と剛腹とを購はれて遂に吉原遊郭の副名主と迄なり、江戸町二丁目に大籬おほまがき寒菊尾張の暖簾を下げ尾張屋三平と名乗るに至つた。その纏末が事明細に贅されてあつた。

宗直が初めて、寒菊尾張を訪ひ、絶えて久しい二十年近い対面の日が来た。善盡し美盡した懇切溢るゝ其日の接待には、物堅い宗直の耳目を聳動するものばかり、一旦茶屋に落付いてから兄に導かれて、尾張屋の暖簾を潜つた途端、盛装の抱遊女全部が、廊下へ手をつけて、一斉に「田舎のお客さんいらつしやーい」と、高らかにくり返したのには度肝を抜かれてしまった。これはこの里の近隣に対する兄宗秀の一種のプライドであつて、上べは華美な生活をしてゐても、いはゞ碌でなしの集りで、田舎にシツカリした根拠を持つてゐる様なマトモな人間など滅多にない所詮は忘八づれの社会である。自分は彼等と均しく浅ましい営みはしてゐても、確固とした正業の出であるといふことを、誇示したものとも解され、却てその心緒には胸迫るものを覚えたとき、後に宗直はよく家人に語つたさうである。それ以来は江戸出府の砌、おりに訪づれる毎に、兄宗秀は子供の様に悦んで、郷里の神社仏閣、道路等の修理を志し、村の祭典の獅子舞に用ゆる乙女達の衣粧に迄心を配りその頃最も珍重された「緋ゴロー」の帯五筋は今以て使用されてゐる程で、あらゆる手段の下に墳墓の地に喜捨した。しかし一方またその私生活には頗りに美色を漁つて一向閨門がおさまらない、今日迄に妻と名のつくもの十幾人にも余つて、今以て定まらず、今度は北廓第一の君と嬌名を江戸中に唄はれ、全盛並ぶない金瓶大黒の太夫「今紫」を根引して宿の妻として帳場へ坐らせた。

なにがさて、物見高い郭内のこと、寒菊尾張の店は灯ともし頃ともなれば、ぞめきの客や、見物人が、何とかして一目「今紫」の丸鬢姿を見んものと、ワンサと押かけ、お蔭で店は大いに繁昌した。好事魔多し、茲に不慮の事件が勃発して、江戸から新門の辰五郎が、バリツとした、子分二人を伴ひ、夜を日に継いで宗直の家へ着いたのは、慶應三年師走も押迫つた二十日のたそがれ刻であつた。

さて辰五郎の来意はどんな事であつたか？ 金瓶大黒から根引した女「今紫」には、意中の男があつた。それは当時三千石の知行を領する、幕府の旗下で、女が身引きされて後は、寒菊尾張の一嫖客として登樓、接近の機会をねらふうちいつか主人の感ずる所となつて、のっ引きならぬ所を押えられて自白を迫られたが、女は言を左右にしてその実を吐かなかつたので、激怒のあまりひどいリンチが加へられた。即ち彼女の手の指は、一本一本悉く逆に折られて仕舞つた。―この事あつて後、旗下某は、事の次第を幕閣の若年寄の手を通じて、北町奉行に摘発を命じた。そこで直ちに召捕となつた宗秀は、性来の剛氣にまかせて烈しく司直に抗弁した爲め、遂に拷問の憂き目を見て、現在石抱きの責苦を受けてゐる次第、是非とも金参百両を準備して欲しい、さうすれば、自分は北町奉行所与力筆頭小野澤十太夫に詫びを入れ、スグに救助の手をささひべて、救ひ出せる自信がある。何はしかれ身柄を貰ひ下げる迄は一刻を争ふ急であるから、即刻調達を頼むといふのであつた。じつと始終を聞き了ると宗直は、言下に申出の金三百両と、別に五十両の包を差出して何分共に頼み入ると、聲涙共に下つた。そのまゝ立上つた辰五郎は、踵を返して、また晝夜兼行江戸へ戻つた。年明けて、衰弱し切つた宗秀の身柄は、一応許されて帰りはしたものの、再び起つ気力はなく、春まだ寒い三月の初めに花に魁けて殞れた。行年四十有五であつた。(昭和三一、九、一一)

#### 四、寒菊尾張聞書の検討

この「寒菊尾張聞書」により三平についての大凡のことは知ることができませんが、その信憑性はどうか。少し検討してみます。

#### (一) 生年について

「弘化二年（一八四五）の秋二十五歳」とありますから、文政三〜四年生まれということになり、明治元年三月に亡くなっていますから行年は四十七〜四十八歳ということになります。一方、文献（一）には文化十二年（一八一五）生まれとあります。

津久根の生家近くの新井家の墓地には三平の墓があり、「釋惠善居士」とあります。施主は弟の宗直です。墓石には一時山谷（浅草）の浄雲寺に葬つてあったのを秋の彼岸に持ち帰った日の九月二十二日と五十三才が刻されています。逆算すれば文化十二年生まれとなります。通常墓石の刻印は信用されるので、これに従えば「寒菊尾張聞書」の記述の信憑性は薄いのかも知れません。以降は文化十二年生まれで年令を考えることにします。



尾張屋三平の墓  
(越生町津久根)

(二) 千葉門下生として講武所の師範代となつたか

講武所が開設されたのは安政三年（一八五六）、このとき剣術の北辰一刀流で名前があるのは、「千葉周作門人三枝庄兵衛組御徒井上八郎」のみで、その後も調べた範囲では三平あるいは三平の本名は見られません。安政三年時、三平は四十一歳ぐらいます。「師範代」のあと千葉道場を飛び出し全国を巡っているということですから、全体的にもっと若い時のように思えます。それに後述するように安政三年の「吉原細見」に「尾張屋三平」の妓楼が出ています。つまり千葉道場に通つたことは仮にあつたとしても、店を持ちながら師範代として講武所に入つたというのは可成り疑わしいと思えます。

(三) 新門の辰五郎と兄弟の契を結び：

何らの資料も見つけることが出来ませんでしたので、何とも言えません。

(四) 大籬おほまき寒菊尾張の暖簾を下げ尾張屋三平と名乗る：

大籬とは吉原で最も格式の高い妓楼を指していました（寛政年間以後、吉原では見世先の籬の高さで妓楼の等級を現し、籬が天井まであるのを大籬、下半分だけが格子になつてゐるのを総半籬と言つていた）。尾張屋三平の妓楼は「吉原細見」の安政三年版から文久三年版に出て来ますが、文久三年版のものをみると「総半籬」の記号が付けられています。それ以前のものは無記号で格が低くされています。「大籬」までは確認できませんでした。

(五) 金瓶大黒の太夫「今紫」を根引して宿の妻として帳場へ坐らせた：

果たして事実でしょうか。一般に言われる今紫（嘉永六年（一八五三）〜大正二年（一九一三）、本名「高橋こうじ」は明治時代の有名遊女・舞台女優。十六歳で江戸吉原の大黒楼に入り、気つぷのよさで知られたといひます。ネットで探すと当時の写真も見られます。子母澤寛の「今紫物語」には「まだ十四の花の蕾に早くも目をつけたのが土佐の山内容堂候」とあり、それまで「静」といつていたのを「今紫」と名をつけたのは容堂とあります。この物語は今紫について相当詳しいですが、三平の名は一切出て来ません。そもそも年代的に疑問があります。今紫が廓の白拍子として「静」の名を披露したのが慶応元年の十四歳の時で、そのとき直ぐに目をつけたのが容堂で、三十八〜三十九歳、既に藩主の座を譲り隠居の身となつていました。遊女屋の亭主がじらしにじらしして太夫として遊女に出したのは十六歳のときで明治元年近くになります。

新門の辰五郎が三平の急を伝えて来たのは慶応三年末で、明治元年（慶応四年）の三月には亡くなっています。そうすると三平が「寒菊尾張聞書」にあるような「金瓶大黒から根引して宿の妻として帳場へ坐らせ

俗名 尾張屋三平 行年 五十三才 山谷浄雲寺葬	明治元辰年 釋 惠善居士 九月二十二日	施主 新井清次郎 宗直
-------------------------------	---------------------------	----------------

た」というようなことはできないと思われま

もつとも、聞書には「今紫には、意中の男があつた。それは当時三千石の知行を領する幕府の旗下で…」とありますから、もともと容堂お気に入り、今紫とは別人であるのかも知れませんが、筆者も少し混乱気味ですが、恐らく三平が相手にしたのはこの「今紫」ではなく別の人気遊女であつたのでしよう。

幾つかの例証ですが、「寒菊尾張聞書」の信憑性は太筋では合つていても詳細部分では今ひとつ低いように思われます。

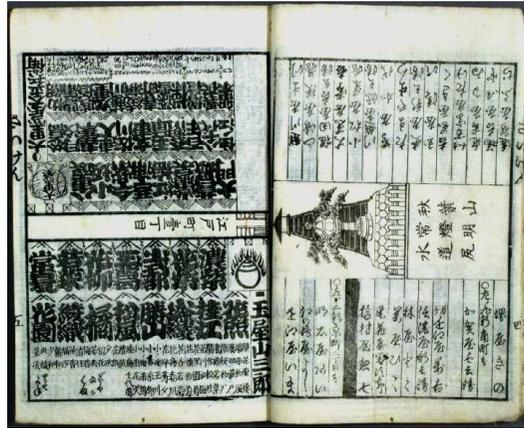
### 五、吉原細見

「吉原細見」は吉原遊廓についてのガイドブックであり、廓内の略地図、妓楼および遊女の名寄、揚げ代金、茶屋、船宿および男女芸者の名寄などが記載されていきました。幕末・明治維新頃から「細見」の内容は粗雑化してきたとも言われます。必ずしも毎年発行された訳ではないようで、ネットでは慶応期のものもとも発行されなかつた可能性もありますが、探すことが出来ませんでした。このガイドブックは細見売りが遊廓内で売り歩いたといえます。風俗店のガイドブックと言つてしまつては風情がなくなるように思います。

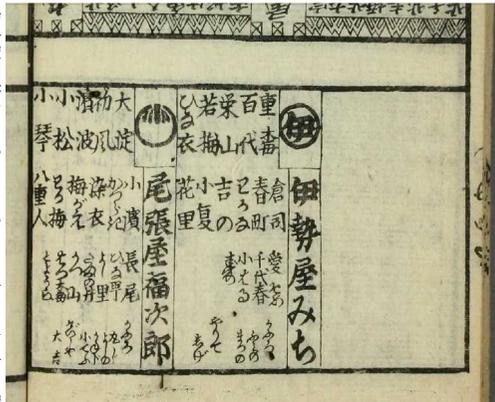
この「吉原細見」に尾張屋三平の名が見えるのは、安政三年（一八五六）版が最初であり、三平四十一歳のときです。場所は江戸町二丁目ではなく、京町二丁目で家紋「鈍菊」とともにあります。まだ掲載面積も小さく店の格を示す記号もありません。小春・松ヶ枝・玉の井・菊の井など十五名の遊女の名が見えますが、名前の上に付ける位付を表すなどのマークはなく、格は低かつたようです。

安政五年版の吉原細見には尾張屋三平の名が見えず、安政六年（一八五九）版では「鈍菊」の家紋とともに「尾張屋福次郎」とあります。家紋が同じなので別人とは考えづらい。何かの事情で福次郎に変わったか、あるいは福次郎とも名乗つたのでしょうか。

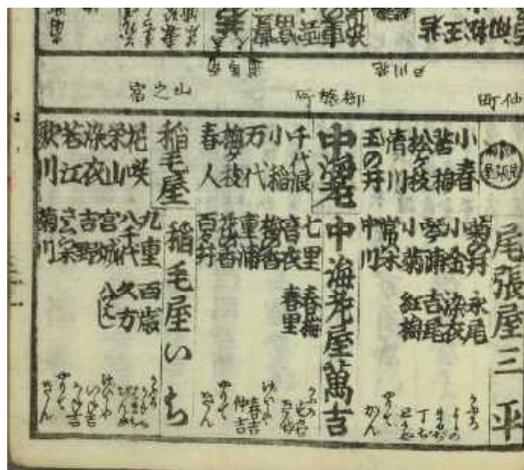
安政七年（一八六〇）版では再び「鈍菊」のマークとともに尾張屋三平の名前が出て来ます。



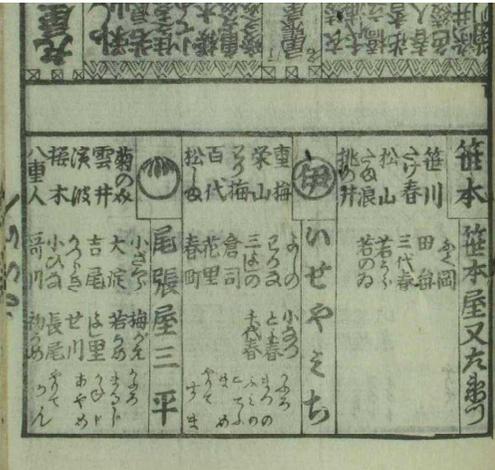
吉原細見の一部（安政7年版）



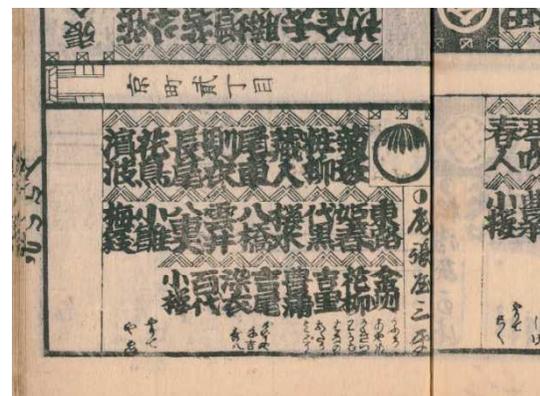
安政6年版吉原細見（左側に尾張屋福次郎）



安政3年版吉原細見（右側に尾張屋三平）



あ 安政7年版吉原細見（左側に尾張屋三平）



文久3年版吉原細見（半頁分を占有）



文久3年版（最初に今紫の名あり）



明治3年版（2番目に今紫の名あり）

ここまでは、記事も小さく安政三年版との差異は見られません。

ところが、文久三年（一八六三）版では半頁程の大きな記事に変貌しています。「尾張屋三平」の文字の上には「総半籬」を示す半月の記号が付いているし、遊女の名前の上には格を示す「二つ山」の記号が付いています。遊女の名前は二十五名となっています。つまり安政七年から文久三年の間に店は発展したことがわかります。しかし「寒菊尾張」という名は「執菊」と尾張屋三平からとった俗称の可能性はあるものこのままには現れないし、場所は一貫して京町二丁目です。元治元年（一八六四）から慶応三年（一八六七）の間の吉原細見は見つかりません（世の中の混乱で発行されなかった？）ので、さらに発展して「大籬」までになったのか、そして江戸町二丁目に移ったのか、共にわかりません。

## 六、おわりに

尾張屋三平のことを調べようとしたが、満足な調査にはなりません。吉原講中もどのような日程・規模だったかを知りたかったのですが全く手掛かりがなく不明でした。しかし幕末の激動の慶応年間前後に三平のような人物が居たことに驚きます。まして、慶応四年（明治元年）三月といえは江戸城攻撃になるかという瀬戸際の西郷・勝会見が行われていた時期です。この時期に不謹慎な表現ではありませんが色恋沙汰の召捕事件が生じていたのであり、歴史の一面を垣間見る思いがしました。

最後に「今紫」について再度検討したことを述べたい。「寒菊尾張聞書」に「金瓶大黒の太夫今紫」とあります。調べてみると金瓶大黒とは大黒屋金兵衛の店の別称であることがわかりました。安政五年版にはありませんが、安政六年版・安政七年版・文久三年版、それに明治三年版の吉原細見の大黒屋金兵衛の店の所を見ると、「今紫」の名が確かにあります。ということは年代的には文久三年版とそれ以前の「今紫」は「寒菊尾張聞書」に出てくる今紫、明治三年版の「今紫」は山内容堂お気に入りのお紫であつてもおかしくありません。つまり「今紫」は二人いたということになります。

これを裏付けるかのように文献(10)には次のような文章もあります。

「金瓶大黒の娼妓今紫

中古名妓の評騷かりし新吉原江戸町一丁目

金瓶大黒の抱へ遊女今紫ハ本名を高橋

お幸と称し始め柳橋にありて半玉の芸妓

たりしが元治元年秋十月同樓の抱となり

慶応二年五月二代目今紫の突出しにて…(後略)」

この文章は「近世人物誌、やまと新聞附録、月岡芳年画」(明治20年)の下に示すような、今紫の錦絵の中にある文章です。

ここには「高橋お幸」、「元治元年秋十月同様の抱となり、慶応二年五月二代目今紫の突出しにて…」とあり、明らかに容堂お気に入り、尾張屋三平は初代の「今紫」を愛したのかもしれないと考えても不思議はありません。

とすれば、「寒菊尾張聞書」の前述の筆者の評価は少し変えなければならぬかも知れません。いずれにしても、尾張屋三平は数奇な運命を一生懸命に生きたのは間違いないことでしょう。

(謝辞) 越生町津久根の新井幾治様には、突然の訪問にもかかわらず尾張屋三平について種々教えて頂きました。記してお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 『おごせの文化財』(おごせ叢書4 平成15年)
- (2) 神山弘・新井良輔『増補ものがたり奥武蔵』(岳書房1984)
- (3) 『古帳庵 鈴木金兵衛をめぐる』(おごせ叢書3 平成6年)
- (4) 新井敏之『素履句集…附随筆』(半空会 1957年)
- (5) 内野勝裕「越生梅郷の俳人新井角丈と芭蕉句碑」『あゆみ13号』
- (6) 安藤直方「講武所」『東京市史稿市街篇44』 P586~
- (7) 子母澤寛「今紫物語」『子母澤寛全集13』講談社 昭和49年)
- (8) 「吉原細見」早大古典籍総合データベース
- (9) 「吉原細見」国会図書館デジタル化資料
- (10) 「近世人物誌 やまと新聞付録第六」明治20年3月(ネット)

『あゆみ』第39号、平成27年3月)

## 尾張屋三平、もう一つの墓

前号(『あゆみ』39号)の「尾張屋三平のこと」の中で、越生町津久根の新井家の墓地に三平の墓があり、「明治元辰年 釋 惠善居士」とあること、また一時、山谷(浅草)の浄雲寺に葬ってあったのを秋の彼岸に持ち帰った日の「九月二十二日」と「五十三才」が刻されているということを書きました。

その後、調査でお世話になりました新井幾治様のお孫さんの柩植伊織様から、浄雲寺に三平の墓のあることを教えて頂いたので、三平の墓が残っていることに驚きつつ尋ねてみました。

前面中央には「武井家之墓」とあり、左側に「惠善信士 慶應四辰年九月廿二日」とありました。信士と居士の違い以外は津久根の



墓と一致します。並んで「恵往信女 元治二丑年四月四日」ともありました。並んでいるので三平の妻ではないかと思えますが良くわかりません。また中央右側には「恵雲信士 弘化四未二月十九日」とあります。このことから柘植様は三平は恵雲信士の養子(武井家)に入ったのではないかと推測されています。

「寒菊尾張聞書」には「春まだ寒い三月の初めに花に魁けて殞れた」とあり、「増補ものがたり奥武蔵」(神山弘・新井良輔著)には、「九月二十二日」について、「江戸の戦乱のため、一時山谷の浄雲寺に葬ってあったものを、秋の彼岸に故郷へ持ち帰った日だそうです」とあります。このことから浄雲寺の墓には三月初旬頃の日付が刻されているのかと思いましたが、実際は九月廿二日となっていました。本当に亡くなった日が特定しづらいと思えました。

また墓の右側面には大きな見事な字体で「尾張屋又十郎」と刻されています。店は三平から又十郎に引き継がれたようにも思い、明治元年と三年の「吉原細見」を見直しましたが、一致する名前は残念ながらありませんでした。

なお、墓の台石には「須藤氏」とありますが、武井家との関係は不明でした。また、浄雲寺の奥様の話は過去帳は空襲で全く残っていないとのことでした。

浄雲寺のお墓を知り得たのは大きな収穫でしたが、詳細を調べることの難しさも痛感しました。が、同時に三平の数奇な運命に思いを馳せ、手を合わせました。情報を提供して頂いた柘植様にお礼を申し上げます。



『あゆみ』第40号、平成28年4月